

3. 「歴史から経験と教訓を得る」

蘇 智 良

藤田 次に3番目の発表に移ります。3番目は、上海師範大学の教授であります蘇先生から、「歴史から経験と教訓を得る」というタイトルでお話をいただきます。蘇先生は日本へ来るのが少し遅れまして、昨夜関西空港に到着され、今朝一番で駆けつけていただきました。では、早速ですがよろしくお願ひします。

蘇 ありがとうございます。まず自己紹介をさせていただきます。私は16年前、霞山会の支持をいただきまして、東京大学で2年ほど研究に従事したことがあります。その後15年前に愛知大学を訪問し、特に文献類を拝見させていただきました。すでにお亡くなりになって5年たちますが、当時は同文書院の卒業生の江頭先生がおられました。非常に時間が早く流れてきたと思います。

いま私は、中日間において歴史を共同研究をする専門家委員会の中国側のメンバーになっています。中国は土地が広いため、中国の10人の代表はすべて北京の人間で、ほかの土地の人間はいません。しかし専門家委員会があり、そこに私が参加しています。本日は、非常に幸いにも多くの同文書院の卒業生の方々、われわれの先輩がおいでになっています。また古い友人にもお会いでき、大変うれしく思っています。

今年は七七盧溝橋事件の75周年で、多くの方々が記念事業の計画をお持ちだと思います。今日の私のタイトルは、歴史の中からいかにして経験と教訓を学び取るかということです。

東亜同文書院は、日本側が1900年に南京につくった、中国学を専門とする高等学府でした。翌年に同文書院は南京から上海に移って上海との縁を結び、近代上海の国際化の過程における重要な文化機関になりました。同文書院は、最初は政治、商務の専門でしたが、それから農工学科、あるいは

中華学生部が増えました。学生は日本の選ばれた青年からなり、上海で漢語、中国史、地理、当時の時事を研究しました。中国の現状を研究することを専門とする学校として、毎年夏休みに学生を中国の各地に視察調査に派遣し、中国の政治経済、社会、あるいは地理といった状況を調査させました。

東亜同文書院の歴史的な役割を正確に評価することは、非常に難しい仕事です。同文書院が存在した年代は日本が大陸拡張政策を行った時期であり、半官半民の性質を持った東亜同文書院は多かれ少なかれ日本政府の大陸政策との関連を持っていたわけではあります。

東亜同文書院の歴史的な役割について、4点申し上げてみたいと思います。第1に、東亜同文書院の創設は、日本が中国文化ならびに中国に注目することを促した点があります。東亜同文書院および、その前身であります漢口の樂善堂、上海の日清貿易研究所の創設者、近衛篤磨、荒尾精、根津一といった方々は、すべて近代日本の興亜論者でした。興亜論は、またアジア主義でした。

福沢諭吉が脱亜論を主張したと同時に、近衛篤磨はアジア主義を提唱したわけではあります。アジア主義というのは、日中両国が同文同種で漢字文化、儒教の倫理は東アジア各国の親和の基礎であり、日本、中国、朝鮮三国はこの基礎のうえで共同して一体化を進め、日本の統制のもとで西洋に対抗するというものです。早期のアジア主義は、日本の民間によるアジアを振興するという理想主義的な色彩がありました。日本が、中国、朝鮮を統制によって白人の植民主義者を駆逐しようというものでした。こうした初期のアジア主義は、思想の極限性はありましたが、軍国主義の思想とも大きな違いがありました。

東亜同文書院の建学の精神、目標、教学の内容は、興亜論の基本的な精神を貫いており、書院も日中親善のかたちで現れました。したがって、中日戦争が全面的に勃発する以前は、東亜同文書院と中国政府、学会、社会の人々との間には、比較的よい関係が保たれていました。また東亜同文書院の学生、先生は、中国人民の抗日闘争、革命活動を惜しむことなく支持されました。

しかし全体的に見たときに、東亜同文書院と日本政府の大陸政策には関連があり、同文書院は設立の初めから日本の文部省、外務省の二重の管理を受けており、後にはさらに直接内閣の管轄を受けるようになっていきます。したがって、半世紀近くの学校の歴史の中で、必然的に日本の官の対中政策の制約を受けることになりました。またこの間に、日中関係のいろいろな大きな事柄と必然的に結びついたわけです。特に中日戦争期間、東亜同文書院は学徒出陣、従軍通訳といった面で直接侵略戦争に参加しています。

第2に、教育史における軌跡です。東亜同文書院の学生は非常に真剣に勉強していました。毎年4月に上海に新しい学生が入学します。初めて中国語に接触するというので、毎朝キャンパスでは中国語を真剣に練習している発音が聞かれました。周囲の上海の住民もこれを讚えていて、毎朝「あーあー」という発音が聞こえるのですから、上海人はこれを同文書院のカラスと呼んでいました。同文書院の言語教育は非常に特色があり、上海語、広東語もあって、これらは一流のレベルに達していました。いま愛知大学に上海語や広東語があるか私は知りませんが、ないのではないのでしょうか。

同文書院は非常に多くの人材を養成し、中国の学者なども養成しました。高爾松、高爾柏、呉開先など、すべて共産党員です。また陳弘、王宏など優秀な卒業生も養成し、後に日本語の教授になっています。

第3点目に同文書院の調査旅行ですが、藤田先

生のご紹介にもありましたとおり同文書院の一つの特徴でした。毎年学生を組織して、40年間にわたって現地調査を行っています。1901年から1945年の間、5000人の学生が参加しており、路線は700本あまりの路線、チベットを除く中国のあらゆる省、区に及んでいます。東亜同文書院の学生の調査内容は、中国の各地の経済状況、経済商業の習慣、地理、風俗、各地の方言、農村の実態、地方の行政組織など、細かいところに及んでいます。

例えば地理ですと、沿線の情勢や気候、都市、風俗、人情、交通、税関など。また経済では、商業、政治などが含まれていました。文字による記録以外に、素描スケッチ、写真などがあります。こうした見聞材料は、学生によって調査旅行報告書に整理されており、これも卒業論文になっています。しかもその報告活動も行われ、同文書院はこの調査に対して実証を重んずる態度を取っています。真実を書くこと、また空理空論を振り回さないこと、それから人のものを盗まないことなどの原則を出しています。最後に、出所の曖昧なものについては点数はゼロということになっています。これはすべて、非常にいい原則だと思います。

東亜同文書院、およびその同文書院大学の毎年の学生の中国旅行は、いろいろ本になっており、これらの本は今日でも見ることができます。巻首巻頭には、孫中山、康有為、黎元洪といった人たちの題字が見られます。

こうした四十数年にわたる中国旅行調査活動は、当然ながら当時の日本の大陸政策の烙印もあるわけですが、同時に異なった時期の調査にはそれぞれの時代の特徴もあり、初期においては比較的自由に、学生が自由に路線を選んで自己鍛錬をしています。こうした社会調査が半世紀近くにわたって続いたこと、範囲も非常に広いこと、調査にあたっての分業も非常に細かいことによって、多くの一次資料が蓄積されました。これが中国社会の経済、政治、社会風俗、文化など、いろいろ



ろな分野を研究する貴重な基礎資料になっています。したがって、これは中国の歴史学、社会学、地方史学において注意すべき、また研究すべき材料です。特に調査の方法、それから資料を整理する方法においては参考にするとところが多くあります。

第4に、1900年から1945年までの間は、まさに日本の軍国主義が戦争に向かう時期でもありました。したがって、東亜同文書院は自覚的、あるいは非自覚的に日本の対中侵略とどうしても結びついてしまったわけです。侵略戦争の間、東亜同文書院の学生たちは従軍通訳、情報収集を行って、日本軍のために情報を提供しています。そういう意味で、中国侵略にも直接かかわっています。同時に指摘しなければいけないのは、戦争を始めた日本政府と同文書院の先生、生徒の間には区別があるということです。根本的に申しますと、同文書院も戦争の被害者であるということです。たとえば第二次上海事変のとき、同文書院の10万冊の図書も戦火に遭って焼けており、これ自体が大きな損害です。

今日から20世紀を振り返りますと、20世紀は戦争の世紀でした。歴史の教訓が明らかにしていますとおり、戦争の時代において教育は時代の

埒外にあることはできません。そしてまた、やむをえずそれに巻き込まれてしまいます。中日両国は文化の源は同じです。平和を保ってこそ、両国に友好と幸福をもたらされるということが出来ます。今日はアジアの協力の時代で、これが潮流になっています。同時に各国も現実的路線が必要であり、アジアを発展させるために必要な道です。私たちは手を携え、ともに新しい世紀におけるアジアの協力を進めたいと思います。歴史を振り返り教訓を汲み取る者は、新しい世紀のアジアの振興の道を進むためです。以上、私の報告です。ありがとうございます。(拍手)

藤田 どうもありがとうございました。書院の持っている中国でのポジション、性格といいますが、それが時代的、あるいはいくつかの分野からいろいろな側面を持っているというお話をおまとめいただきました。何かご質問はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

これまでの発表を時間刻みで急いでやっているものですから、なかなか追いついていけないところがあるかもしれません。少しお考えいただいて、夕方にもまたご議論いただければと思います。では先生、どうもありがとうございました。(拍手)

4. 「東亜同文書院関係者の中国革命支援 —孫中山と山田兄弟の関係を中心に—」

馬場 毅

藤田 4番目は、本学の馬場先生のご発表です。タイトルは、「東亜同文書院関係者の中国革命支援—孫中山と山田兄弟の関係を中心に—」ということでお話させていただきます。では、よろしく願います。

馬場 ただいまご紹介にあずかりました馬場でございます。早速始めさせていただきます。東亜同文書院は1901年に設立されました。そのとき

の設立趣意書によれば、日清戦争後の列強からの分割の危機に際して中国保全と日中の共存共栄を掲げ、そのための政治経済面の実務家養成を目的としました。この点についてはいま蘇先生もおっしゃいましたように、私もアジア主義だと考えています。

しかしながら、設立のときすでに日本は台湾を植民地化し、中国分割に参加し、中国保全に敵対